

幼児期の自己制御機能の発達 —幼稚園での子どもの特徴と親子関係—

分担研究者 森 下 正 康(和歌山大学教育学部教授)

研究要旨 幼稚園における幼児の自己制御機能について、思いやりおよび攻撃性との関係、さら

に親子関係が自己制御機能の発達にどのような影響を与えるかについて検討した。そのために幼稚園児（3:10～6:10）の母親316名とクラスの担任教師11名に対して、子どもについて評定を求めた。分析の結果、幼稚園での子どもの特徴について、次のことが明らかとなった。

（1）自己制御（自己抑制と自己主張）・思いやり・攻撃性尺度に関して、家庭での母親評定と園での担任評定との相関は全体に低い値であった。また二人の教師による評定間の一致度も低かった。

（2）担任評定による園での子どもの自己抑制の発達に関して、男子では年中から年長にかけての発達が著しく、女子では年齢の上昇と共に発達していた。自己主張の発達に関しては、男子では年齢による変化がないのに対して、女子では年少から年中にかけて発達が見られた。

（3）思いやりについて、年中児では、男子は自己抑制の高い群の方が得点が高いが、女子には有意差はなかった。年長児では、男女共に自己抑制も自己主張も共に高い群の得点が高かった。

（4）攻撃性について、年中児では男子は自己抑制の低い群の方が、女子は自己主張の高い群の方が攻撃性が高かった。年長児では、男子の場合は自己主張が高く自己抑制の低い群の攻撃性が高く、女子の場合は自己抑制の低い群の攻撃性が高かった。

（5）園での自己制御について、年中児の場合、母親の受容的態度が男子の自己主張を育て、母親の誘導スタイルが女子の自己制御能力全体を育てる可能性があった。それに対して、年長児の場合、母親の統制的態度や力中心スタイルが男子の自己抑制機能の発達を阻害する。また、女子に対しては、母親の力中心スタイルが自己主張機能を高め、さらに、母親の統制的態度が自己主張だけが強く自己抑制の低い子どもを育てる可能性がある。以上の結果は、親子関係と家庭での子どもの特徴との関連とは異なった結果であった。

■ 研究目的

人間が豊かに生きていくために、自己を抑制する機能と自己を主張する機能のバランスのとれた発達、つまり自己制御（self-regulation）機能の発達が重要だと考える。昨年度の、自己制御機能の発達に関する研究において、母親評定についての分析から次のような結果が得られた(森下、1999)。

幼児の自己抑制機能は「欲求不満耐性」「遅延可能性」「根気」の3因子から成っていた。また、自己主張機能は「正当な主張」と「能動性」の2因子から成っていた。自己抑制機能の発達について「欲求不満耐性」と「根気」

は年中から年長にかけて発達することが明らかとなった。他方、自己主張機能の方は3歳児（その多くは4歳）以後すでに年齢による変化はなかった。

これらの自己制御機能の中で、抑制機能の発達が「思いやり」の発達と関連性が深いということ、さらに自己主張機能も、時には「思いやり」の発達を促進する可能性があるということが明らかとなった。また、攻撃性の抑制には自己抑制機能が深く関連していた。

自己制御の発達に対して母親の果たす役割について検討した結果、男児の場合、母親の受容的態度が子どもの自己主張機能の発達に、

時には自己抑制の発達にもプラスの影響を与える可能性があったが、両機能の発達に同時にプラスの影響を与える態度パターンは明確にはならなかった。女兒の場合、母親の受容的態度が自己抑制機能の発達にプラスの影響をもたらす可能性があるのに対して、統制的態度や力中心の養育スタイルは自己抑制や自己主張の発達にマイナスの影響をもたらす危険性があった。

すでに指摘したように、昨年度の研究には次のような問題点と課題が残った。子どもの自己制御等については母親の評定に基づくものであったが、母親の評定が妥当性の高いものであったかどうかが問題となった。さらに、母親の養育態度等も母親自身の評定に基づくものであり、子どもの変数と母親の変数間の関連を分析した結果には、同一評定者による反応セットなどの影響が反映されている可能性があった。また、家庭での子どもの特徴はそのまま幼稚園等での行動に現れるのか違うのか、幼稚園での子ども自己制御の特徴に関して、母親との相互作用はどのような影響を与えているのか等の課題が残された。

そこで、本研究においては幼稚園場面での子どもの行動に焦点を当て、担任教師等からの評定と母親からの評定を基に、次の課題を検討したいと考える。

家庭での子どもの特徴と幼稚園での子どもの特徴の比較（母親評定と教師評定の一致の程度）。

教師評定の信頼性の検討。

幼稚園での子どもの自己制御、思いやり、攻撃性の発達の様相。

幼稚園での自己制御と思いやりとの関連。

幼稚園での自己制御と攻撃性との関連。

親子関係が幼稚園での子どもの自己制御の発達にどのような影響を与えるか。

■ 研究方法

1. 調査対象

和歌山市近郊のW幼稚園において、年少・年中・年長児 357 名について、その母親に評定を求めた。この結果については先の研究（森下、1999）において報告している。次いで園児の担任教師に対して、クラスの子ども一人一人について評定を求めた。さらに、そのクラスの子どもたちをよく知っていると考えられる隣のクラスの担任教師にも評定を求めた。

したがって、一人の子どもについて3人が評定したということになる。記名式とし、幼稚園の全面的な協力により回収率 100%となった。その中で、記入漏れなどのデータを除いて、分析の対象となったのは、自己抑制や自己主張の項目に関する因子分析には母親評定によるデータを用いたが、その数は表1に示すように計 316 名であった。自己制御と他の変数との関連についての分析対象は、すべてのデータのそろった子ども（表1）計 275 名であった。

2. 手続き

母親に対しては園児を通じて家庭に質問紙を配布し、すべての質問紙に対して評定を求めた。その後、幼稚園の教師に対しては、自己制御、思いやり、攻撃性について幼稚園での観察を基に一人一人の子どもについて評定を求めた。一人の子どもについて二人の教師が評定することとなったが、その際、相談しないで独立に記入するように依頼した。教師の負担を少なくするために、自己制御については母親評定に基づいて因子分析をおこない、尺度を作成し、その尺度について教師評定を求めた。

3. 調査時期

1999 年 2 月から 4 月。

4. 調査内容

自己制御に関しては、柏木の研究（1988）や教師や児童を対象とした予備調査を基に作成された矢川（1999）の項目を参考にして、自己抑制については 25 項目、自己主張については 30 項目を作成した。作成に当たって、家庭において親が観察することのできる内容に焦点を当てた。また、この項目の特徴は「・・・ができる」という表現ではなく、「・・・する」とうように行動の側面を評定する表現になっている。自分の子どもに当てはまるかどうか、「はい」「？」「いいえ」の3件法で評定を求めた。

母親の評定データに基づいて、因子分析をおこない、自己抑制については3因子（欲求不満耐性・遅延可能性・根気）15項目（表2）、自己主張については2因子（正当な要求・能動性）14項目（表3）からなる尺度を作成した（森下、1999）。教師評定についてはこの尺度を用いた。

思いやりと攻撃性：森下（1985）の項目

それぞれ8項目ずつをランダムに配列をし(表4、5)、「はい」「?」「いいえ」の3段階評定を求めた。

養育態度の受容と統制：鈴木ほか(1985)から受容と統制についてそれぞれ8項目ずつ選択しランダムに配列した(表6)。上記と同じ3件法であった。

養育スタイル：末田・庄司・森下の研究(1985)を基に10の日常場面を選び、各場面において「統制・無視」と「協調性」を示す各10項目ずつ選出した(表7)。それらを、力中心養育スタイルと誘導的養育スタイルに対応する尺度とした。各項目に対して、そのようなことがどの程度あったかについて、「よくある」「ときどきある」「あまりない」の3段階評定を求めた。

■ 研究結果

1. 評定間の関連性

1) 母親評定と担任評定との相関

教師が認知する子どもの特徴と母親の認知する子どもの特徴が一致するかどうかを検討した。そのために、先の母親データの因子分析に基づいて作成された尺度について、担任評定による各尺度得点を産出し、その尺度得点と母親評定による尺度得点との相関係数を求めた。その結果を表8に示す。

自己制御のうち自己抑制について、全般に母親評定と担任評定との相関は低い。それに比較して、自己主張の側面の相関はやや高い値を示している。思いやりについての両者の相関はかなり低い。また攻撃性についても低い値である。

2) 教師間の相関

教師評定は担任と隣のクラスの担任が評定したものである。教師間の評定は、母親と教師間の相関よりも全体に高い値を示している(表9)。

全体として自己抑制および自己主張に関する相関はほぼ同様な中程度の値を示している。自己抑制は年齢によって結果が異なり、年中児の相関係数の低さが特徴となっている。

思いやりに関しては教師評定間の相関は低いに対して、攻撃性に関しては中程度の相関となっている。

2. 幼稚園での子どもの特徴

1) 自己抑制と自己主張の発達の変化

自己抑制と自己主張の得点分布を図1と図2に示す。教師評定(担任評定)の結果は、前回の母親評定の分布と比較して、自己抑制は満点が多い他はよく類似している。それに対して、教師評定の自己主張の分布は、親の評定よりも分散が多いことが特徴である。

自己抑制の年齢による変化を図3に示す。母親評定に比較して、教師評定は男子の場合はほぼ一致するが、女子の場合は教師評定の得点の方が高い。また、男子について、教師評定は年少、年中ではあまり変化がなく、年中から年長にかけての発達が著しい。この点は母親評定の結果と類似している。女子については、教師評定はいずれの年齢においても男子より得点が高く、かつ年少、年中、年長と学年が進むにつれて得点が上昇している。この点は、年少から年中にかけて変化の少ない母親評定とは一致しない。

自己主張に関する結果を図4に示す。教師評定では男子の場合、自己主張得点は年齢によってほとんど変化していない。また年少、年長児では自己主張に関する教師評定の得点は、母親評定の得点より低い。女子の場合は、教師評定の得点は年少から年中にかけて上昇し、年長ではあまり変化が見られない。女子についての教師評定得点は、年少児、年長児では母親評定得点よりも低い。教師評定の男女差については、年少児において女子の自己主張得点が著しく低いのが特徴である。

2) 思いやり、攻撃性の変化

思いやりに関する得点を図5に示す。

教師評定の方が母親評定の結果よりも男女ともに得点が低いのが特徴である。男子について、教師評定による年中児の得点が他の年齢よりも低いという点は、母親評定の結果と類似している。また、女子については、年中から年長にかけて思いやり得点が増加している。男女差については、年中、年長児において女子の方が男子よりも得点が高い。この点は母親評定の結果と類似している。

攻撃性について、教師評定によれば、男女とも年齢と共に得点が低下している(図6)。また、女子の方が男子より攻撃性得点は低く、特に年中、年長の女兒の攻撃性の低さが特徴的である。

3) 自己制御と思いやり、攻撃性

教師評定によって子どもの自己制御を分類し、それが教師評定による思いやりとどのような関連があるかについて分析した。最初に、男女別に自己抑制、自己主張の各尺度の

中央値を用いてH群とL群に分類し、その組み合わせによって4群を作り、それぞれの群について思いやり得点の平均値を求めた。年少児はデータ数が少なかったので、分析は省略した。

思いやりについて、年中児に関して、男女各群の思いやり得点の平均値を図7に示す。男女別に2（自己抑制H・L）×2（自己主張H・L）の2要因の分散分析をおこなった。その結果、男子について抑制H群の方がL群よりも思いやり得点有意に高かった。女子には有意差がなかった。年長児に関する結果を図8に示す。同じような分散分析の結果、男女共にそれぞれ自己抑制、自己主張要因の両方に有意差があり、自己抑制の高い群の方が思いやり得点が高く、かつ自己主張の高い群の方が思いやり得点が高かった。したがって、年長児の場合、男女に共通して、自己制御の発達している子どもは思いやり得点が高いといえる。

攻撃性についても同じような分析をした（図9、10）。その結果、年中児について、男子では自己抑制の低い群の方が高い群よりも攻撃性が高かった。女子では、自己主張の高い群の方が低い群よりも攻撃性が高かった。年長児について、分散分析の結果、男子では自己主張の高い群の方が攻撃性が高く、また自己抑制の低い群の攻撃性が高いという傾向があった。つまり、自己主張が高く自己抑制が低い男子の攻撃性が高いということが特徴であった。それに対して、女子の場合は自己主張に関係なく自己抑制の低い群の方が攻撃性が高かった。

3．親子関係と自己制御

担任評定による自己制御と、母親評定による親子関係とどのような関係があるかについて分析した。その結果、母親の受容的態度に関しては、年中児の男子に関してのみ有意差があり、自己主張の高い群の方が母親の受容得点が高いという傾向があった（図11）。

母親の統制的態度に関しては、年長児に特徴が見られた（図12）。男子の場合、自己抑制の低い群の方が母親の統制得点高いという傾向が見られた。それに対して、女子の場合は交互作用が有意で、自己主張が高く自己抑制の低い群の母親は統制得点が著しく高かった。

力中心スタイルに関して、年長児について有意差があった（図13）。年長児の男子にお

いて、自己抑制の低い群の母親の方が力中心スタイル得点が高かった。それに対して、女子の場合は、自己主張の高い群の方が、母親の力中心スタイル得点が高いという傾向があった。

誘導スタイルに関して、年中児の女子において有意差がみられた（図14）。つまり、自己抑制の強い群の方が母親の誘導スタイル得点が高く、さらに自己主張の強い群の方が母親の誘導スタイル得点が高かった。したがって、自己制御の発達している女子の母親は誘導スタイル得点が高いといえる。また、年長児の男子に関して、自己抑制の低い母親の誘導スタイル得点が高いという傾向がみられた（図15）。

■ 考 察

1．評定間の一致

母親評定と担任評定について、自己主張に関しては中程度の一致が見られたが、自己抑制に関しては低い一致度であった。そして、思いやりや攻撃性に関しては低い一致度であった。

幼稚園における子どもの特徴について、教師間の相関は自己抑制、自己主張、攻撃性は共に中程度の一致度であった。思いやりに関する一致度は低かった。いずれも期待したほどの高い一致度ではなかったが、教師の見る視点や基準の違いを反映しているのだろうか。

母親と担任との評定について、自己抑制の一致度が低かったが、教師間ではそうでなかったということから、自己抑制と自己主張の観察の難しさの違いもさることながら、家庭と幼稚園ではちがった特徴を子どもが示している可能性がある。それは自己抑制についての母親と担任との評定間で年長児に関して相関が低く、かつ年長児女児において、幼稚園での自己抑制が家庭での自己抑制よりも高い値を示していたことから考えられる。

思いやりに関しては、いずれの評定間の相関も低く、評定の一致の難しい特性として、今後の研究に留意しなければならない。

2．親子関係と自己制御機能の発達

親子関係の特徴が子どもの自己制御におよぼす影響は、年齢によって、また男女によって異なるという可能性が示された。

男子について、年中児に関して、子どもの

自己主張が高い場合、母親の受容得点が高いという傾向があった。したがって、母親の受容的態度が年中の男児に対して自己主張を育てる可能性がある。年長児に関しては、子どもの自己抑制が低い場合、母親の統制的態度得点が高いという傾向があった。また、子どもの自己抑制が低い場合、母親の力中心スタイル得点が高かった。さらに、子どもの自己抑制が低い場合、母親の誘導スタイル得点が高いという傾向があった。したがって、年長になると、受容的態度はあまり関係なくて、強い統制的態度や力中心スタイルが示される親子関係のなかでは、子どもの自己抑制機能が育たないと考えられる。さらに強い誘導スタイルも男子の自己抑制機能を育てない可能性がある。

女子について、年中児に関して、自己抑制も自己主張も高い、つまり自己制御能力が高い場合、母親の誘導スタイル得点が高かった。したがって、母親の誘導スタイルは年中の女子に対して自己抑制と自己主張の両方（自己制御能力）を高める可能性がある。それに対して、年長児に関しては、自己主張が高くかつ自己抑制が低い子どもの場合、母親の統制的態度が強いという特徴があった。さらに、自己主張が高い場合、母親の力中心スタイル得点が高いという結果であった。つまり年長になると、母親の誘導スタイルは関係なく、力中心スタイルの強い親子関係が、子どもの自己主張を高め、さらに統制的態度は自己主張が高く自己抑制の低い子どもを育てる可能性がある。

以上の結果と、母親評定を中心に分析した前回の研究結果とを比較すると、唯一の共通点は、年中男子において、母親の受容的な態度は子どもの自己主張を発達させる可能性があるという点であった。それに対して差異点は多く、その内容は対照的であった。男子の場合、年長児では、母親の受容的態度が家庭での子どもに対して、強い自己抑制・弱い自己主張を育むか、あるいはその反対に弱い自己抑制・強い自己主張を育む可能性があった。それに対して幼稚園での子どもの特徴にはそのような関連は見られなかった。むしろ家庭では示されなかった、母親の統制的態度や力中心スタイルが意味を持ち、それらは子どもの自己抑制の発達にマイナスの影響を与えていた。このことは、統制的態度や力中心スタイルの母親をもつ男子のなかには、家庭では一見自己抑制的ではあるが、幼稚園

ではそれを発散している子どもがいる可能性を示している。

女子の場合、年中児に関して、家庭では示されなかった特徴が幼稚園場面では示された。つまり、母親の誘導的なスタイルが自己抑制も自己主張も両方とも高い、自己制御機能の発達した子どもを育成する可能性が示された。年長女子に関しては、母親が統制的態度でない場合、家庭で自己抑制も自己主張も共に高い、つまり自己制御機能の発達した子どもを育成する可能性があった。他方、統制的態度が強い場合は家庭での子どもの強い自己抑制・弱い自己主張という特徴を形成する可能性があった。それに対して、母親の統制的態度は幼稚園での子どもの弱い自己抑制・強い自己主張という全く正反対の特徴を形成する可能性が示された。このように同じ母親の統制的態度が、家庭と幼稚園における子どもの特徴に全く異なった影響を与えている点は注目すべきことである。家庭で母親から押さえつけられている女子は家庭ではきわめて抑制的であるが、幼稚園ではその反対にきわめて主張的だという可能性がある。また、力中心スタイルの影響も、家庭と幼稚園では異なり、力中心スタイルの強い母親の子どもは家庭では抑制的であるが、幼稚園では主張的だと考えられる。このようにみえてくると、教師評定と母親評定の結果があまり一致していなかったという理由の一端が理解できる。このような点についての詳細な分析は今後の課題である。

3. 今後の課題

すでに述べたように、一人一人の子どもについて、家庭での子どもの特徴はそのまま幼稚園等での行動に現れるのか、両者が一致する子どもと一致しない子どもがいるとすれば、それはどうしてか。この点についてはさらなる分析が必要である。

先の研究でも指摘してきたように、子どもの発達にとって父親の影響は重要である。したがって、家庭のなかでの子どもに対する母親と父親の役割、その機能が子どもの自己制御機能の発達にどのような影響を与えるかを明らかにすることが、残された重要な課題である。

これまでの研究は、子どもの母親および幼稚園担任教師の評定を通じての研究であった。次に子どもの実際の自己制御行動がどのように発達するかについて、子どもの行動観察を

通じて明らかにする必要がある。具体的には、幼稚園において、幼児が仲間との相互作用のなかでどのような自己抑制行動や自己主張行動を示しているか、そのような行動がどのように変化し発達していくのか、またそれが仲間関係に対してどのような影響を与えるかという課題である。このような研究を通じて、子どもの自己制御行動の発達をどのように理解したらよいか、またその発達を援助するために、まわりの大人たち（保育者や親）がどのようにかかわっていけばよいかという示唆

が得られるだろう。

以上、子どもの自己制御機能が発達するためにはどのような環境や経験が必要なのか、さらに周りからのどのような援助が必要なのか、まだ多くの課題が残されている。

（付記）本研究を進めるに当たり、和歌山中央幼稚園の山下悦子園長先生をはじめ、先生方や保護者の方のご協力を得ました。深く感謝いたします。